

モンゴル語のアスペクト形式に関する基礎研究

— 日本語との対照の観点から —

阿 拉 塔

1. 動機と目的

近年、日本とモンゴルの政治、経済、教育などのあらゆる分野の交流に伴い、モンゴル語を母語とする日本語学習者は年々増え続けている。そのため、モンゴル語と日本語の対照研究、特に、文法項目に焦点をあてた研究の必要性が高まってきている。

学習者が第二言語を習得していく過程には、学習環境要因¹、学習者要因²、社会・心理的要因³など様々な要因が関わっていると言われている(Larsen・Freeman&Long1991)。よって、第二言語としてのアスペクトの習得メカニズムを解明するためには、それぞれの要因に関する検討が必要である。その中で、特に学習者要因の解明は、学習者の第一言語体系を把握でき、より効果的な学習方法を探る上で重要な手掛かりになると考える。

したがって、本稿では、モンゴル語のアスペクト形式に焦点をあて、日本語と対照させて分析し、モンゴル語のアスペクト形式とそれが表す様相の特徴を検討することにより、モンゴル語を母語とする日本語学習者がアスペクトを勉強する時にどのような利点、あるいは障害があるかを追求することを目的とする。

2. モンゴル語

モンゴル諸語は、テュルク諸語と共に、アルタイ語族というグループに属する。テュルク諸語というのはトルコ語やカザフ語、ウイグル語などの言語を指す。これらの言語はいずれも単語(語幹)の後に「てにをは」に相当するものをつけることができる。また、語順が「主語+目的語+動詞」であり、日本語に似ていると言われている。

特にモンゴル語については、昔から日本では研究が進んでいて、日本語と同系ではないかとの説が出されるほどである。しかし、文法はよく似ているものの、語彙に関しては客観的な共通性が証明されておらず、定説となっていないのが現状である。

3. アスペクトとは

モンゴル語のアスペクトの概念について以下の2人の研究者の見解をみたい。モンゴル言語研究の権威である清格尔泰氏は、モンゴル語のアスペクトは動詞自体の性質を示す範疇であり、それは本動詞が出来事の発達過程のどの段階にあるのか(開始、終了)、また、本動詞がどのような特別な性質を持つのか(暫時的、瞬時的、反復的、習慣的など)をあらわす文法的範疇である(清格尔泰 1999, p.290)としている。また、日本人の研究者である松岡(2004, p.114)は、モンゴル語のアスペクトを表す形式には接尾辞、形動詞形⁴(日本語の連体形に相当する形)、「形動詞形+bai」、「副動詞形⁵(日本語の連用形に相当する)+bai」があるとしている。

アスペクトとは、基本的に、完成相と継続相の対立によって示される、〈出来事の時間的展開性(内的時間)の把握の仕方の相違〉を表す文法的カテゴリーであり(工藤 1995, p.8)、アスペクトは開始、継続、終結などの出来事の局面を表す概念であり、例えば、動詞の「走る」の場合は「走る」という動作の始まりなのか、最中なのか、終わったところなのかを表す表現である。つまり、「走る場所」、「走り出す」、「走っている」、「走った」などを表す表現である(白川 2001, p.82)。

また、アスペクトは、出来事の時間的展開性の把握の仕方の相違を表す文法的カテゴリーで、基本的に、完成相と継続相に分かれる(工藤 1995, p.8)。完成相は初めから終わりまでのまるごとのすがたで表すもので、ル・タがこれに相当し、継続相は動作や変化の持続過程の中にあるすがたを表すもので、テイルがこれに相当し進行の意味を表す(高橋 2003, p.66)。アスペクトはテンスとともに、時を表す基本的文法形式であり、言語習得において、重要な研究対象になっている。アスペクトは情報伝達の上で重要な項目の一つであり、また、成人第二言語学習者にとって習得が難しい項目であるとも言われている(白井 1998)。

4. モンゴル語のアスペクト形式に関する先行研究

ここで、モンゴル語のアスペクトに関する先行研究を概観し、モンゴル語のアスペクト形式とそれが表す様相の特徴を検討する。

栗林(1992)によると、モンゴル語の動詞の体(aspect)を完了体と瞬間体という二つの分類できる。

1)完了体：-tš(əx)「～てしまう」

jab-「行く」-jabtš(əx)「行ってしまう」

or-「入る」-ortš(əx)「入ってしまう」

2)瞬時体：-(ə)sxī·,dzən「ちょっと～する」

jab- 「行く」 jabəsxɪ ,jabdzən- 「ちょっと行く」
üdz- 「見る」 üdzəsx ,üdzdzən- 「ちょっと見る」

そのほかに、並列の副動詞は、動詞 bai- 「～ある(いる)」がついて動作の aspekto の意味を表すことがあり、その例として(id-ədž bai-n. 「食べている(進行)」)を提示している。

また、橋本(1993)はモンゴル語(ハルハ方言)に着目し、ハルハ方言には、動詞語幹に付いて aspekto 的な意味を表示する接尾辞 <-san⁴>⁶があるが、この接尾辞には「完了表示」「過去表示」「仮定、譲歩」「比較構文」「修飾句」などいくつかの意味があるとしている。以下の例文は橋本(1993) から抜粋したものである。

- 完了表示 Namayg xarixad düü xooloo idsen baylaa.
(私が帰宅した時には、弟は食事をしてしまっていました。)
- 過去表示 Mongol ardiyn xuvisgal 1921 ond yalsan.
(モンゴル人民革命は 1921 年に勝利をおさめました。)
- 仮定 Eejiyg ajildaa yavsan bol bi geree tseverlene.
(母が仕事にいったなら、私は家を掃除します。)
- 譲歩 Bi üxsen chi yasiy ni andaxgüy.
(死んでも骨を間違わないの意で)私は彼をよく知っています。)
- 比較構文 Us uusnaas tsay usan ni deer.
(水を飲むよりお茶を飲んだほうがいい)
- 修飾句 Getel xaragdaxgüy yum bol bayxgüy yum gesen batlagaa ügüy.
(しかし、見えないものは存在しない物であるといった確信はありません。)

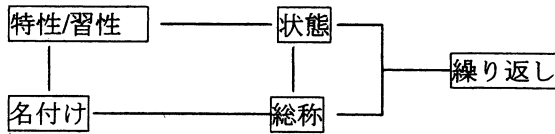
モンゴル語は、習慣を表すのに、英語のように多様な手段を用いず、普通、動詞語幹に付加された習慣の接尾辞 <-dag⁴>⁷がこの役割を果たす。

この習慣相接尾辞 <-dag⁴>には〈繰り返し〉、〈状態〉、〈特性/習性〉、〈名付け〉、〈総称〉の5つの異なる意味がある。これらの意味は次のような意味ネットワークを作ることができる。なお、以下の例文、図1とその解説も氏の論文より抜粋したものである

- 繰り返し Bid dandaa süütey tsay udag.
(私たちはいつもミルクティーを飲んでいる。)
- 状態 Miniy бага xüü Tsetserleg xotod sudag.
(私の次男はツェツェレブ市に住んでいる。)
- 特性/習性 Ene xün zurag sayxan zurdag.
(この人は絵を綺麗に書く。)

- 名付け Ene xüuniyg Dorj gedeg.
(この人の名前はドルジという。)
- 総称 ülsön xün xool iddeg tsangasan xün tsay uudag.
(空腹の人はご飯を食べ、喉の渴いた人はお茶を飲む)

図 18



行為や事態の繰り返しの頻度が密になり、もはや間隔が識別できないほどになると状態化が起こるようになる。それは個別的な行為や事態ではなく、連続体や集合体に適用されたりする。この状態化を或る指示対象に唯一的に付与すれば特性/習性と解釈される。他方、状態化の結果が恒常化すれば、名付けとなり一般的な、すなわち、非特定の指示対象に適用先が限定されれば、総称となる。

以上のことから、「習慣相」あるいは「習慣的」と呼ばれてきたものの正体は、5つの異なる意味の連関し合うネットワークの総体だったのである。したがって、〈-dagʷ〉は図1のような意味のネットワークを担う接尾辞である(橋本 1995,p.64)。

モンゴル語のアスペクト形式には 1)接尾辞 2)形動詞形 3)「形容動詞+bayi-」形 4)「副動詞+bayi-」形などが挙げられるが、松岡(2004)では、これらの形式の中から 4)の「副動詞+bayi-」形にしぼって論じられている。

方法としては、まず、中国・内蒙古自治区で出版された小学校の国語教科書の中から、モンゴル語の 4)「副動詞+bayi-」形が使われている用例を収集し、これらの用例を統合関係(共起する動詞や副詞、文中で現れた位置など)に基づいて分類している。そして、その中から三つの分類枠を抜粋し、それらに基づいた用例を各々に比較し、ホルチン方言の母語話者に対して調査した上で、その意味の違いを明らかにしようとしている。

まず、松岡(2004)では、先行研究について、アスペクトを表す「-ju bai-」形に関する記述の問題点を次のように指摘している。なお、以下に示す例文とその解説も松岡(2004)より抜粋したものである。

「-ju bai-」形の意味は、事柄の局面とは全く関係なく、事柄の「継続」をあらわすと記述したほうが妥当である。「進行」の意味は、「-ju bai-」の「継続」の意味が動詞の語彙の意味と結合して派生するものである(松岡 2004,p.116)。

例 1 emici ayi tan du talaraju bayin·a .

(お医者さん、あなたに感謝しています)

‘talara-’ (感謝する) という動詞は開始点と終了点が明確でない。「感謝」のはじまりや終わりは想像しにくい。だから、この場合「-ju bai-」形が表しているのは、「進行」ではなく単なる事柄の「継続」である。

例2 surulcaqu asayudal degere orosiju bayiy-a jalqayu qoyiryu jang surtal-i baycalbal douraki metü kedün jü il-ün ilerel tei bayiday.

(勉強における怠惰な態度の現れ方を以下のようにまとめることができる。)

‘orosi-’ (ある) という存在を表す動詞と結合した例であり、このように存在をあらわす動詞とアスペクト形式が共起するのはモンゴル語の特徴で、日本語やほかの多くの言語ではこのような結合は基本的に不可能である。

このようにモンゴル語のアスペクト形式は、日本語のアスペクト形式と違って、それを実現する手段(形式)が多様であり、モンゴル語独特な表現方法がある。

5.むすび

以上、モンゴル語のアスペクトを表す多様な形式を、先行研究を基にまとめてみた。検討してきた先行研究からもわかるようにモンゴル語のアスペクト形式の中でも、日本語の「テイル」に相当する形式は少なくとも4つある。そこで、渋谷(2001)の「母語-学習言語間の対応関係と習得の難易度」をみてみよう。

渋谷(2001)における表1の解説は、以下のとおりである。

(A)の「分化」は、英語では1つの要素しかないのに、日本語に2つのものがある場合で、「ある」と「いる」の使い分けの習得などがこれにあたる。習得の最も困難なことが予想される場合である。

(B)の「導入」は、英語にはなく日本語にのみある要素を習得する場合で、トピックをマークする「は」の習得などがこれにあたる。

(C)の「削除」は、英語にはあるものの、日本語には対応する要素がないという場合で、名詞の複数形や冠詞などがここに分類される。

(D)の「統合」は、英語では2つの形式で言い分けているのに、日本語では1つの形式しか使わない場合(英語の現在完了形 ‘have-en’ と現在進行形 ‘be-ing’ に対する日本語の「ている」)。

(E)の「対応」は、英語と日本語で1対1で対応する場合である。過去を表わす ‘-ed’

と「た」の関係などが後者(E)の例であり、両言語の意味と形式が1対1で対応するために、形を置き換えるだけで簡単に習得が達成されることが予想されるという。

表1 母語 - 学習言語間の対応関係と習得難易度

難易度	対応関係	母語(英語)	学習言語(日本語)	例(日本語)
難 ↑ ↓ 易	(A)分化	1	2	「ある」と「いる」
	(B)導入	0	1	「は」
	(C)削除	1	0	複数形・冠詞
	(D)統合	2	1	「ている」
	(E)対応	1	1	過去形

出典:(渋谷 2001,p.87)

渋谷(2001)の母語 - 学習言語間の対応関係と習得難易度という議論をモンゴル語と日本語のアスペクト形式の相関関係を検討してみよう。モンゴル語のアスペクト形式の中で、日本語のテイル形に相当するものは、1)接尾辞 2)形動詞形 3)「形容動詞+bayi-」形 4)「副動詞+bayi-」形という4つであり、表1で考えると統合的な関係になる。さらに表1から読み取れるのは、英語に日本語のアスペクト形式に相当するものは2つあるから、英語母語話者にとって、日本語のアスペクト形式が他の日本語形式(「ある」と「いる」など)より、比較的習得の難易度が低くなるということである。

上述のように考えると、モンゴル語には、日本語のアスペクト形式に相当する形式が4つあることから、英語を母語とする日本語学習者より、モンゴル語を母語とする日本語学習者のほうにとって、日本語のアスペクトは学びやすい項目になることが推測される。先行研究では、アスペクトは情報伝達の上で重要な項目の一つであり、成人第二言語学習者にとって習得が難しい項目である(白井 1998)と言われているが、その説は、日本語学習者全般に当てはまるものではなく、少なくとも、モンゴル語を母語とする日本語学習者にとって、日本語のアスペクト形式は比較的習得しやすい項目であるということが言えそうである。

本稿では、モンゴル語を母語とする日本語学習者がアスペクト形式を学習する時に、どのような利点、あるいは障害があるかを検討することを目的とした。本論文を通して、言えるのは、モンゴル語を母語とする日本語学習者がアスペクト形式を学習する時に、形式だけに着目してみると、モンゴル語と日本語のアスペクト形式は統合的な関係にあり、それが、モンゴル語話者にとって日本語を習得する時に一大利点であるといえる。しかし、その反面、母語であるモンゴル語のアスペクト形式が日本語のアスペクト形式より多いがゆ

えに、学習者に混乱が生じることも否めない。したがって、今後の課題として、モンゴル語のAspect形式をさらに検討し、モンゴル語を母語とする学習者が、日本語のAspectを習得する上での障害を主に追求することを挙げたい。

注

- 1) 自然習得か教室習得か、目標言語圏か外国語圏か。
- 2) 母語、年齢、動機付け、学習スタイル
- 3) 目標言語の文化・社会に対する心理的距離
- 4) 形動詞は a) 「～すること；～したこと」などの名詞的な意味をもち、あるいは、b) 「～する～；～した～」と、ほかの名詞を修飾する形容詞的な意味をもつ動詞活用形の総称である。
- 5) 副動詞は副詞と同様に、ほかの動詞、形容詞、副詞などを修飾する形である。
- 6) 〈-san⁴〉は母音調和の原則に従って〈-san, sen, son, sön〉の4つの交替形をもつ。なお、接尾辞の右3)肩に付いている数字は、母音調和による交替形の数と表す。
- 7) 〈-dag⁴〉は動詞語幹の母音に応じて、〈-dag, -deg, -dog, -dög〉のような4つの交替形をもつ。なお、接尾辞の右肩に付いている数字は、母音調和による交替形の数をあらわす。
- 8) 原文では、5つの意味が英語表記で書かれている。特性/習性(Nature/Habit)、状態(Stative)、繰り返し(Repetitive)、総称(Generic)、名付け(Naming)であった。

参考文献

- 王福清(2002)『蒙古語教程』内蒙古人民出版社。
- 小澤重男(1964)『モンゴール語四週間』大学書林。
- 工藤真由美(1995)『Aspect・テンス体系とテキスト - 現代日本語の時間表現 -』ひつじ書房。
- 栗林均(1992)「モンゴル語」『言語学大辞典』第4巻, pp. 501-517.三省堂。
- 嘎瓦(1998)『蒙古国吉立尔文』内蒙古文化出版社。
- 渋谷勝己(2001)「学習者の母語の影響 - 学習者の母語が影響する場合としない場合がある -」『日本語学習者の文法習得』pp. 83-99.大修館書店。
- 清格爾泰(1999)『現代蒙古語语法』内蒙古人民出版社。
- 白井恭弘(1998)「言語学習とプロトタイプ理論」奥田祥子『ボーダーレス時代の外国語教育』pp.70-108. 未来社。
- 白川博之(監) 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(著) (2001)『中上級を教える人のための日本語ハンドブック』スリーエーネットワーク。
- 高橋太郎(2003)『動詞九章』ひつじ書房。

高橋太郎(2005)『日本語の文法』ひつじ書房.

橋本邦彦(1993)「〈-san4〉の意味論 - 1つの形式と複数の意味の対応について -」『室蘭工業大学研究報告 - 文学編 - 』43号,pp.49-94.室蘭工業大学.

橋本邦彦(1995)「習慣相」『室蘭工業大学研究報告 - 文学編 - 』45号,pp.35-67.室蘭工業大学.

フフバートル(1993)『モンゴル語基礎文法』インターブックス.

松岡雄太(2004)「現代モンゴル語ホルチン方言のAspect - 「副動詞形+bayi-」形を中心として」『福岡発・アジア太平洋研究報告』13号,pp.113-119.福岡アジア都市研究所.

水野正規(1993)「現代モンゴル語文法研究の問題点」『日本モンゴル学会紀要』24号,pp.1-10.日本モンゴル学会.

Larsen-Freeman, D&Long, M.H1991*An introduction to second language acquisition research*.Longman, UK.(邦訳)牧野高吉・萬谷隆一・大場浩正訳(1995)『第二言語習得への招待』、鷹書房.